

出前授業による一貫連携教育の試み

－幼稚園と中学校1年生の場合－

追手門学院小学校校長 東田 充司

1. はじめに

追手門学院で一貫連携教育を推進する一貫連携教育機構の任務について、梅村修機構長は本年度の幼小中高大連携事業計画の冒頭で下記のように述べている。(以下引用)

さて、一貫連携教育機構の使命は、いうまでもなく、こども園から大学院までを備える総合学園として、追手門学院内部の紐帯を固くし、人と情報の行き来を活発にすること、そして2012年3月の学院教育改革検討委員会答申で示された「6つの教育の柱」～志の教育、心の教育、国際教育、自校教育、キャリア教育、一貫連携教育～を具現化し、広く世の中の付託に応えることだ。言い換えれば、未だ緊密とは言い難い、各学・校・園をつなげる仲介の労をとり、人や情報の流れを作ると同時に、既存の、図らざる連携事業にも光を当て、“みえる化”に努めることを任務としている。(引用終わり)

この要請に基づき、昨年度と本年度の2年間、園児(年少・年中・年長に一部こども園児を含む)生徒(中学1年生)に出前授業を行った。一貫連携教育推進への一助を目的とした、絵本の読み聞かせと国語授業であった。その概要をここに報告する。追手門学院ならではの良き一貫連携の授業展開を希求したく、ここに大方のご批正をお願いする次第である。

2. 幼稚園での絵本の読み聞かせ

[概要]

クラス単位中心で教育活動を行う日々の保育とは異なり、2クラス合同で遊戯室(講堂)を会場とし、大形絵本による迫力ある読み聞かせを行うことにした。また保護者の参観を可とし、出前授業の終了後は、出前授業内容の補足説明や家庭での絵本の読み聞かせの留意点などを直接お話しする保護者教育の側面も持たせることにした。幼稚園では一般の幼稚園同様に通常の絵本のみを使用しており、大画面が必要な場合はプロジェクター等の教育工学機器に依っていた。園長をはじめとする幼稚園の皆様方のご理解とご協力が大きく、年間3回のこの出前授業は大切な幼小連携のひとつとして定着しつつある。

〔ねらい〕

字が読めない発達段階だから、読み聞かせをするのが良いという教育的背景があるのではない。挿絵を通してそこに展開している物語をイメージ化することに大きな価値がある。耳で聴き、目で読み取るのが絵本の楽しみであると言える。

実施にあたっては、単に絵本を読むことだけにとどまらず、動作化を促したり声を揃えて復唱させたりするほか、必要に応じて人形やぬいぐるみ類を併用していくことで大人数での子どもたちの反応を生かし、授業効果を最大限に引き出すものとした。

〔読み聞かせに採り上げた絵本〕

絵本の選定にあたっては、子どもたちの心を動かし、適応力を育てることを第一義とした。絵本には様々な生き方が語られているが、現実体験には限界がある。真善美を求めらる中で、怖いことや恐ろしいことも、子どもたちの成長過程には大切である。物語体験として持っておれば、危機に陥った時に判断基準のひとつとなる可能性があるからである。

また既知の絵本であっても、新たな発見や感動を共有できる可能性があるものも選定の目安のひとつとした。以下、第6回までに渡って採用した絵本を列挙する。

第1回 2013年6月27日 年長児対象

「にゃーご」宮西達也(鈴木出版)

「おおきなかぶ」A. トルストイ 内田莉彩子(福音館書店)

第2回 2013年12月12日 年中児対象

「でんしゃにのって」とよたかずひこ(アリス館)

「ぐりとぐらのおきゃくさま」中川李枝子(福音館書店)

第3回 2014年1月23日 年少児対象

「なにをたべてきたの？」岸田衿子(佼成出版社)

「もちづきくん」中川ひろたか・長野ヒデ子(ひさかたチャイルド/チャイルド本社)

第4回 2014年5月30日 年長児対象

「もぐらバス」佐藤雅彦・うちのますみ(偕成社)

第5回 2014年12月10日 年中児対象

「もったいないばあさん」真珠まりこ(講談社)

「ぐりとぐらのおきゃくさま」中川李枝子(福音館書店)

第6回 2015年1月20日 年少児対象

「ぐりとぐら」中川李枝子(福音館書店)

「きらきら」谷川俊太郎(アリス館)

ることを躊躇しがちな年齢であるが、身近なテーマに積極性を期待するものである。

音読発表では、グループ毎にお互いの良さを考えさせながら鑑賞させ、発表活動に生かした。

〔音読を生かした物語文の実践〕

国語科学習指導案

指導者 東田充司

1. 日 時 平成25年7月23日(火)第2時限 1年ABC組合同
平成25年10月28日(月)第2・4時限 1年4・3組
10月31日(木)第5時限 1年1組
11月2日(土)第4時限 1年2組
2. 場 所 追手門学院大学6101教室・追手門学院大手前中学校1年各教室
3. 学年・組
1年ABC組合同(男子49名、女子43名、計92名)
1年1組(男子17名、女子8名、計25名)2組(男子17名、女子8名、計25名)
3組(男子21名、女子6名、計27名)4組(男子15名、女子12名、計27名)
4. 教 材 「仙人」芥川龍之介
5. 目 標
 - ・自らの願いを成就させる為に、努力し続けた主人公の思いを読み取ることができる。
 - ・登場人物の会話や行動から心情をとらえ、物語の主題について考えることができる。
 - ・登場人物の生き方について、自分なりの意見や感想を持ち、発表することができる。
6. 指導にあたって

(1) 生徒観

小中一貫連携に関する授業を中学校で実施するにあたり、指導者が大部分を既知でない受講者を対象とした授業展開を行う関係上、ここでは生徒観の記載を行わない。

(2) 教材観

この「仙人」は、昔大阪の町に奉公に出てきた権助が人生の儂さを憂い、口入れ屋の番頭に不老不死の仙人になりたいと相談したところから始まる。番頭が医者に相談すると、その女房から「うちへよこせば二、三年中に仙人にする」と口から出任せを言う。翌日やってきた権助に対し、女房は「二十年間奉公すれば仙人になる術を教えてやる」と言い、以後二十年間無給で奉公させた。二十年後に仙人になる術を求めた権助に対して、女房は無理難題を押し付けてその場逃れをしようとした。しかし権助は仙人になれ、空高く昇って行ったのであった。

本作品は芥川龍之介作品の中でも年少文学と呼ばれるものの一つであるため、ある意味道徳

的要素を併せ持つ。権助が本当に仙人になることなど、誰が予測出来たであろうか。ここに大きな感動があり、この点で文学作品の主題に迫る読み取り教材として最適であると判断する。ここでは真面目に努力すれば、願いは叶うのである。

また、この物語は登場人物の会話文の比重が極めて高く、たとえ読書経験が少なくても、筋を追っていく中で比較的容易に場面の流れを捉えることが出来る特徴がある。そして、具体的事実や出来事の様子が各場面の冒頭に並んでおり、さらに心理描写が多用されている。ここに着目することにより、登場人物の心の揺れ動きが明確に把握できる。こういった叙述は、一時間に限った新たに出会った本学級での授業に際して、扱いやすい教材であると言えよう。

さらにこれらの特徴があるこの作品を扱う授業では、自分なりの意見をまとめる文章表現の場としても最適である。自分が感じ取った意見を綴り、発表する場としても位置付けたい。

(3) 指導観

中学生になると、発達段階から、どうしても皆の前で自分の意見を発表することに消極的になってしまう傾向が生じがちである。学習する教材が現代の生活経験から遊離した大正時代の丁稚奉公物語であれば、なおさらであろう。ただ今回の「仙人」は小・中学生が一般的に読む芥川龍之介作品の中にはまず入っておらず、既読による知識や既成概念といった条件の違いが無い為に、全員が新鮮に取り組むことが期待できる。そこで「登場人物の中で誰が一番得をしたか」という目的意識をもとに読み解き、そう自分が考えた理由を書いて発表するという手立てをとることによって文章表現意欲を促し、さらに出来るだけ多くの生徒の発表を行わせたい。

ここでは、どの登場人物を自分が選んだとしても誰もが得をしていることは間違いない。権助は一見損をしている様に見えるが、最後は望み通り仙人になれたのである。医者や女房はもちろん、口入れ屋の番頭は得のみである。権助を自分が選ぶということは、損得を天秤にかけが必要が生じる訳で、詳細に本文に戻って確認する必要が生じるのである。単純に比較するだけではないところに、この課題設定が持つ必然性は大きい。

また権助ははじめから仙人であったという極論すら成立する。狡猾な女房に天罰を下す目的で医者の家に奉公に来て、二十年の間給金を要求せず、炊事、洗濯、拭き掃除、果ては医者につき添い薬箱を背負うことが出来たのも、人間ではない仙人だったからだともまた出来る。「権助は丁寧に御辞宜をすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇って行ってしまいました」という一文は、ずっと仙人であり続けたからこそその描写かもしれない。この意見に対しては、一番最後に真意が分かるという芥川龍之介独特の計算された作風として確認をさせたい。

7. 指導計画

全1時間での補充教材の為、指導計画の記載を省略する。

8. 本時の目標

- ・仙人になりたい願いを成就させる為に、医者の女房の口車に乗せられながら二十年間無給で

奉公した権助の一途な思いを読み取る中で、夢を叶えることについて考える。

- ・場面毎の登場人物の会話や行動から心情をとらえ、物語の主題について考える。
- ・登場人物の生き方について、自分なりの意見や感想を持ち、発表する。

9. 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	準備物
1. 物語の背景を知り、本時のめあてを知る。	・「一番得をしたのは誰か」を本時の中心課題とすることで、読みの目的を明確化させたい。	教材文
2. 音読を行い、自分の意見をまとめる。	・最低限の粗筋を話すことで、自分の意見がある程度予想させた上で音読に臨ませることを求め、より主体的な読みを促す。	ワークシート
3. 意見を発表し合う中で、思いや主題を話し合う。	・今回の答えはひとつでないことを前提に発表させることにより、多面的な読み取りの理解促進を図り、作者の意図に迫ることを試みる。	
4. 本時のまとめをする。		

〔ご高評価欄〕

〔音読発表を目指した詩の実践〕

国語科学習指導案

指導者 東田充司

- 日時 平成26年10月30日（木）第4時限：1年2組 第5時限：1年4組
31日（金）第4時限：1年3組 第6時限：1年1組
平成26年12月12日（金）第2時限：1年A組 第3時限：1年B組
- 場所 追手門学院大手前中学校・追手門学院中学校共に 視聴覚教室
- 学年・組 1年1組（男子14名、女子13名、計27名）
2組（男子14名、女子13名、計27名）
3組（男子16名、女子11名、計27名）
4組（男子14名、女子11名、計25名）
1年A組（男子8名、女子8名、計16名）
B組（男子20名、女子13名、計33名）
- 教材 「どいてんか」 島田陽子（島田陽子詩集『うちしってんねん』より）

5. 目 標

- ・会話表現や詩の持つリズムを楽しみ、自ら声に出して詩を読もうとすることができる。
- ・情景や心情をとらえ、皆と協力して熱い思いがよく現れる様に考えて読むことができる。
- ・詩に用いられている表現技巧について理解し、その効果を理解することができる。

6. 指導にあたって

(1) 生徒観

小中一貫連携に関する授業を中学校で実施するにあたり、指導者が大部分を既知でない受講者を対象とした授業展開を行う関係上、ここでは生徒観の記載を行わない。

(2) 教材観

この「どいてんか」は、大阪万博のテーマソングである「世界の国からこんにちは」の作詞者である島田陽子の作品である。教材として優れた詩とは、読む人の心を揺さぶるものであり、指導者が目的とする本時の目標に沿った内容を有するものである必要があることは言うまでもない。「女の神輿」に対してはっとしたり、共感を覚えたり、強く感動したりと、作品とそれを読む人によって違いはあれ、本教材はある意味で常識外であるという特徴的な内容や、作品の持つ独特の表記からも生徒の心に強い印象を与える力に満ちているのではないかと判断している。

本作品は島田陽子詩集『うちしってんねん』の中でも、短く端的な表現校正の作品であり、国語が苦手な生徒であっても理解を積み重ねることが出来ると判断できる。さらに女子生徒にとってはテーマや信条に共感し易く、より力強く元気に表現活動を行うことが期待できる利点がある。

さらに、大阪弁特有のアクセントを強調することで詩のリズムを自ら体得し、自己表現することにより、工夫した音声表現が出来る。こういった特徴あるこの作品を扱う授業では、自分なりの表現の場としてもまた最適である。自分が感じ取った思いをもとにして、個人として発表する場面も設定も可能であると思われる。

(3) 指導観

中学生になると、その発達段階から、どうしても皆の前で自分の意見を発表することについて、少しずつ消極的になってしまう傾向が生じがちである。音読（一斉音読やグループ音読、個人音読を含む）に於いても同様であると言える。

音読とは、語、文、文章、作品等、文字言語で表現されたものを、音声言語に還元する読み方である。純正且つ明晰な日本語を音声面に於いて習得させる機能と、意味理解を的確にして味読し鑑賞を深化させる機能とを合わせ有している。朗読とは音読の一種であり、読み取った事柄や内容、あるいは印象や感動等について、自分なりの解釈を加え、これを自己表現する読み方である。読み手が自分の解釈に即して、これを意識的に表現しようと努めながら音読する場合を朗読という。

さらに群読は、複数の読み手による朗読であると言える。集団読みではあるが、斉読ではなく、役割や場面の分担を決め、演劇的な表現読みを一般に群読と言う。今回はこの群読的な手法を一部に採り入れることにより、一人では朗読が不得手な生徒であっても響く声を出すことが出来ることを目指したい。さらに分担読みを行う中で、お互いの声を丁寧に深く聞くことが出来る様にした。

これらの観点から、詩としての文体に音声化するに適したリズムを有した「どいてんか」は音読や朗読、群読に最適な作品であると言える。連毎の対照的な表現の描写的な部分にも着目し、各自が思い描く音声表現の工夫も最大限生かして発表させたいと願っている。

7. 指導計画

全1時間での補充教材の為、指導計画の記載を省略する。

8. 本時の目標

- ・神輿を担ぐ人々の心意気を想像し、その様子がよく現れる表現のあり方について考える。
- ・会話や行動から心情をとらえ、工夫した音読や朗読、群読を行う。
- ・表現技巧としての反復や擬音語を理解し、具体的な表現の工夫を知る。

9. 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	準備物	
1. 女の神輿について考え、本時のめあてを知る。	・「どいてんか」を視写することで、作品を正確に読ませ、本時の目的を明確化させたい。	神輿写真 教材文 ワークシート	
2. 第1連の音読を行い、登場人物を考える。	・問いの答えはひとつでないことを前提にして「わっしょい わっしょい」を誰が言ったのかを考えさせる中で、より主体的な読みを促す。		
3. 第2連の音読を行い、神輿の様子を考える。	・各連の最後が下がっていることに着目させ、神輿の動きや祭りの激しさを感じ取らせる。		
4. その場の様子がよく現れる朗読や群読をする。	・分担読みを試みる中で詩の持つリズムに気付かせ、効果的な群読に移行させる一助とする。		CD ラジカセ 神輿音
5. 本時のまとめをする。			

〔ご高評欄〕

〔音読を生かした物語文の授業後の感想〕 追手門学院大手前中学校1年生

- ・今日の授業で、あらすじを読み取ることや、音読することの意義など、国語が得意になる方法がこの授業から学びました、これからも、このことを思い出して生かしていこうと思いました。

